

# 石川雅望『天羽衣』ノート

山本和明

## はじめに

六樹園こと石川雅望による『天羽衣』は、文化五年に江戸佐久間屋藤四郎ほか二書肆から刊行された。中本二巻二冊からなる本書に関する研究は、小篇にもかかわらずかなり進んでいる。それはともかくにも、馴染み深い羽衣伝承をふまえたものであることも関係あるのだろう。「文人の消閑の技」(日本古典文学大事典)とも評されている本書であるが、むしろこうした小篇にこそ、作品の作りざまなるものがほの見えてくるのではないか。本稿では、備忘録も兼ねて従来の研究を整理しつつ、ささやかながら一典拠の指摘を行い、『天羽衣』の狙いにまで思いを至したいと思う。問題を多く取り残している。ノートと称する所以である。

## 梗概・研究史概観

まず、便宜上、その「梗概」を纏めておく(各章立てに丸数字で番号を付す)。二冊のうち上之巻は「三保浦」「磯田浜」「舞竹」の三章から、下之巻は「かたみのこがね」「初花たをるなただち」「尼法師の娘の君」「あまつをとめ」「忍ぬのこ」の五章から成っている。

〔上之巻〕

① みほのうら

昔、駿河国有度郡に三保の長者と磯田の長者という者がいた。十月、囲碁に興じる時、それぞれに男子が誕生、白良と黒良と名付けられる。翌年生まれた黒良の妹小松は、白良の許婚となる。そうした縁からか、磯田が災難で窮したときも、三保の長者は援助を差し伸べるのだった。月日はながれ、白良八歳の時、疱瘡を病み醜男になるが、「男子は顔貌をえらぶべきかは」とて大事に育てられる。三保の長者は貧しき者達を救う慈悲深き人であったが、定業からかついに空しくなる。七年が過ぎ、白良十七歳、三保の浦で天女から羽衣を授けられる。これを秘め置けば幸いあるとし、千日後に此所に受け取りにくると天女は云う。またこの時、しばし憂き目を見ることも予言される。帰途、彼は黒良に羽衣をだまし取られてしまう。

② いそだの浜

三保の長者の死後、三保が家は零落し、忠僕久が残るのみであった。磯田の長者夫婦は十六歳になった小松を三保の家に嫁がせる気などさらさら無く、近国を尋ねて婿さがしをする。久は磯田の家へ赴き、かつて三保の長者が施した支援を説き、援助を請うが、逆に打擲されてしまう。磯田の娘小松の、白良に嫁する志は変らず、父母の行状を諫めるのだった。

③ まひたけ

志太の長者は、いやがる小松と結婚しようと、即仏という尼を介して磯田に申し出る。聘物の前日、かつて磯田家に仕えた雲井が即仏の処へやってくる。共に磯田の家へと赴くが、雲井の持ち込んだ舞茸によって人々は酒に酔うごとく舞い踊る。この騒動で結納の儀式は中断される。雲井は例の羽衣を黒良から取って白良のもとへと戻させる。

〔下之巻〕

④ かたみのこがね

羽衣の戻った三保の家では、売り払った蔵跡に大きな穴を見つける。掘ってみると碁盤の形の石があり、下の甕から三保の長者の遺金一万両があらわれ出でる。三保の家は再び繁栄を取り戻す。

⑤ 初花手をるなかだち

霜月の三保の明神の祭り、黒良は国守の妻の乳母の娘を見初める。娘と密会すべく、侍の悪藤太に金を渡して手引を頼むが、乳母の娘という初花を、まずは自分が手折らんと、悪藤太は娘の部屋に忍び込んだのだが捕われてしまう。彼に協

力を頼まれた即仏尼も、逃げ出す途中溺死する。

⑥ 尼法師の嫌の君

磯田の家では志太と語らい、再び小松を嫁がせようとする。何も知らぬ小松は偽られて志太のもとに嫁にやられる。大雨降るなか、途中の森で婚礼の輿が一時避難する。雷鳴とどろき、供人たちが輿を一旦捨て置くのだが、再び輿を担ぐとき、同じ森に避難していた即仏尼の野辺送りの駕籠と入れ替わってしまう。花嫁の到来を喜ぶ志太の家で輿を開けてみると、それは花嫁ならぬ尼の死骸で、式はめちやくちやになる。

⑦ あまつをとめ

森に残された輿のなかに小松の姿はみえない。雲井に小松は助けられていたのであった。一方、悪藤太のもとへ遣わした文のために黒良の悪事が露見、磯田夫婦黒良も繩に引かれていく。志太も磯田との縁組を思い切る。

天女との約束の日、白良は母とともに三保の浦へと向かう。三保の浦で、雲井と小松に出会い、白良と小松は夫婦の縁を結ぶのであった。天女の降臨遅きことを白良が云うと、雲井は襦ぎをすべしと云う。白良が海水で体を洗うと、海水五色の色をなし、世にためしなき美男へと転じた。時に大空より紫雲たなびき、雲井は天女となって空高く上っていくのであった。

⑧ めぬのこ

獄屋に捕らえられた黒良親子は、夢に犬となった己の姿をみ、悔い改める。寛侑の政をもって悪藤太は遠国に追放され、黒良親子は家財没収、放免される。悔い改めた黒良は白良に助けられ、また磯田夫婦は出家してこれも白良の庇護を受けた。そのうち三保の家は海道第一の富家として繁昌したという。

短い作品ながら、それなりのまとまりをもった本書に関して、『日本古典文学大辞典』では次のように説明を加えている。

作者は巻頭に『元々集』『袖中抄』『童蒙抄』を引いて、天女の天下った土地の考証を試み、また東遊駿河舞の歌を抄出して、謡曲『羽衣』に世界を借りたことを明らかにしているが、白良の醜貌と小松の貞節を表わす構成は、明の『醒世恒言』の『陳多寿生死夫妻』から取った。同書からは『両県令競義婚孤女』の入話をも取り、結末には李漁『笠翁十種曲』の『奈何天伝奇』を踏まえる。『今昔物語集』巻二十八ノ二十八「尼共入山食茸舞語」から舞茸の趣向を構えて滑稽味を醸し出し、小松の貞節、黒良・悪藤太への懲罰によって勧善懲悪を表わし、天女の予言などで筋の統一を図った。文体は古雅な擬古文であ

り、文人の消閑の技という性格が濃い。

第③章「まひたけ」に「今昔物語集」の名を確認しうることを思えば、『天羽衣』については、右の説明に云うごとく、それ以外の章立て・作品へ眼差しが向けられるのも当然のことであった。研究は、もっぱら漢籍との関わりを中心に、従来追跡されてきたきらいがある。

山口剛は名著全集『読本集』解説（一九三〇年）において、中国白話小説『醒世恒言』巻一「両県令競義婚孤女」冒頭挿話（『今古奇観』にもあり）との関わりを初めて指摘する（なお、その梗概は山口論文、重友論文に詳細に記されている）。それを受けて重友毅は「六樹園の雅文小説」（『国語と国文学』第十三巻第八号）で「天羽衣」と「両県令競義婚孤女」冒頭挿話との比較を行った。その見解は、人物構成の類似に重きをおいてのものであった。

浙江衢州府の王春・王奉の兄弟にはともに一女がいた。王春の女を瓊英、王奉の女を瓊真という。瓊英には富豪潘百万の子潘華、瓊真には蕭別駕の子蕭雅という許婿がいた。瓊英十歳の時、父母は相繼いで死去。彼女は叔父王奉の許へ引取られる。ある年の元旦、潘華と蕭雅とが、期せずして王奉の家で落ち合う。潘華の美貌と蕭雅の醜貌。蕭別駕が没し、蕭家はこれより衰退する。王奉もここに至つてついに不良の心を起し、王春が臨終に、瓊英のこと、わけても潘華との結婚のことを、くれぐれも頼んで置いたことも忘れ、ついにおのが娘の瓊真を姪と欺いて潘家に嫁入らせ、瓊英をおのが娘として蕭雅に娶らせた（後略）。

梗概に示す王春・王奉の兄弟と三保・磯田の長者、蕭雅・潘華と白良・黒良（一部志太の長者も）、瓊英と小松の間等々に関わりを見る。『天羽衣』第①章前半・第②章との間に、「ある程度の関係」（重友毅論文）を見出すのである。

また重友毅は、二つの典拠をも指摘する。一つは『醒世恒言』巻九「陳多寿生死夫妻」（『小説精言』巻四にも掲載）であり、もう一つは『笠翁十種曲』第十一・十二冊「奈何天伝奇」である。麻生磯次「江戸文学と支那（中国）文学」（一九四六）も、その流れを踏襲するものであった。

『醒世恒言』巻九「陳多寿生死夫妻」冒頭で、道を隔てて住む陳青・朱世遠なる二人の素封家が、常に仲よく一面

の象棋盤を囲んで楽しみ興じていたこと、陳青の男兒陳多寿と朱世遠の女兒多福が許婚同士であること、多寿が十五の歳、凶らずも悪症にかかつて全身に毒が廻り、醜貌の身となるという設定は『天羽衣』第①章に通じる。多寿の病癒えず、父母もまた節を守らざることを知って、密かに縊死を企てるほどの多福の貞節ぶりは、小松に通じるものであろう。多福の真情に対し、ますます気の毒となった多寿が、一夜砒霜を仰いだだが、凶らずも適薬となり、長年の悪疫もここにようやく癒えるという点で、『天羽衣』第⑦章に類似したと言えなくもない。

『笠翁十種曲』第十一・十二冊「奈何天伝奇」末尾に示された、醜貌の主人公關素封が、呉氏の奨めに任せ湯殿に入つて垢を摺り落すうち、思わずも下から美しい皮膚があらわれ、顔を磨くに従つて、満面の痘痕も悉く取除かれ、束の間に美しい男になつた点は、より『天羽衣』第⑦章との関連を伺わせるものだし、単身敵地に入り込む前に、貧しき家への貸付証文を焼き捨て、主人の後日のために陰徳を施した家来の關忠など、三保の長者に比すべきものがある。

なお、重友毅の指摘する次の点、すなわち袁將軍の愛妾周氏を娶らんとて、素封の家より周氏を迎える乗物が来た時、袁夫人は咄嗟のたくらみから、まだ知られぬを幸いとし、何食わぬ顔で呉氏を身代わりにその乗物に乗せた点、この身代わりの趣向と比される第⑥章に関してはひとまず留保しておこう（後述）。

また近時発表された閩小妹氏の論考「石川雅望『天羽衣』論—中国典故との比較から—」（信州大学経済学論集三七—九九七年）は、新たに『警世通言』卷二五「桂員外途窮懺悔」との関わりを指摘する。特に『天羽衣』上之卷第①章「三保の浦」第②章「磯田の浜」と下之卷第④章「かたみのこがね」第⑧章「ゑぬのこ」にその利用を確認し、作品全体の構成は本作に拠ると主張する。没落時、援助を乞うが断られる設定、亡父の埋めておいた金による再興、犬となる夢など、関連深い点が散見され、その関わりを伺わせるに十分な説得力をもつ。また氏の言う如く、「両県令競義婚孤女」の示していた人物関係が「桂員外途窮懺悔」にも認められる以上、従来指摘されていた「両県令競義婚孤女」は

「天羽衣」の典拠から外されるべきであろう。「天羽衣」は今日なお典拠研究するにたる対象だったのである。

古典典拠との関わりに関しては、閻小妹氏の言うように「基本的に白話小説「桂員外」の構成に基づき、それに従来指摘された白話小説「陳多寿」、戯曲「奈何天」を部分的な趣向として取り入れて成った」とすべきであろう。

\* \* \* \* \*

一方、作品に関する日本種の指摘については、どうだろうか。

謡曲「羽衣」の世界に基づいた作品であることは、その題名からも当然のこととみなされよう。派生した形ではあるが、佐藤深雪氏「飛驒匠物語」典拠私考」（日本文学 昭和五二年一〇月）は、大江文坡「成仙玉一口玄談」中「三保箒良得羽衣之談」（徳川文芸類聚3所載）との関連をみているようである。

先にも述べたが、作中「宇治大納言のしるし給へる今昔物語に舞茸をくひたる尼どものそゞろに山を舞あるきし事を載給へり。是と同物なるべし」と作者によって記されている如く、「今昔物語集」卷二十八ノ二十八「尼共入山食茸舞語」と第③章との関わりも明らかなるところである。

それらを除いたところでは、甚だ乏しい。鈴木敏也「浪漫小説家としての石川雅望」（『近代国文学素描』所収、一九三四）が、第⑥章の趣向に「堤中納言物語」の「花桜折る少将」終曲と「思はぬ方に宿りする少将」の乗物違えとをつき交えて翻案したと指摘する。さらに稲田篤信氏「江戸小説の世界―秋成と雅望」（一九九一）はそれを受けて次のような見解を示された。<sup>注1</sup>

この部分、「堤中納言物語」の「花桜折る少将」と「思はぬ方に宿りする少将」の乗り物違いの場面を援用していることは、鈴木敏也に指摘がある。また、演劇のだんまりの手法が用いられていることも、一読して明らかであろう。私はさらに、ここに「西山物語」のかへが婚家に死して嫁ぐ場面を重ね合わせたい。美少女と老女、死の輝きと醜悪さなど、かへと尼法師の対比は意図されたもので、雅望の作意は明白である。（略）雅望は「西山物語」のかへの死後の花嫁の場面を、得意の

グロテスクな描写に転化している。

『笠翁十種曲』第十一・十二冊「奈何天伝奇」と第⑥章との関連を指摘した、先の重友毅の問題意識とも交錯する箇所である。しかし雅望が直接的に扱ったのはそれではなかった。

### 一 典拠紹介

今般呈示するのは、それほど特異な作品ではなく、よく知られた『雑談集』に収められた小編である。まずはその本文を掲げることにした。

フルキ物語、人ゴトニシル事ナレドモ、事ノ次ニ書付ケ侍ル。

昔サルベキ人ノスエナガラ、マツシキ姫君ヲハシケリ。乳母俱シテ鞍馬ニ常ニ参籠シテ祈念シケリ。十四五バカリナルガ、ミメカタチ勝テウツクシカリケルヲ、房主ノ老僧心ヲカケテ、如何シテ近付ント案ジテ、事々シキ装束シ、紫ノ帽子キ、金ノ杖ツキテ、戸帳ノ内ヨリイデ、乳母モ姫君モネイリタリケルヲ、「ヤ、」トヲドロカシテ、「イカナルアマサカサマノ事ナリトモ、房主ノイハム事タガヘズハ、姫君メデタクサカヘ給ベシ」ト云テ、戸帳ノ内ヘ入りケリ。

乳母悦テ、ヤガテ房ヘカエルニ、老僧ハサキニ帰リテ待ケリ。乳母房主ニ夢ダニモメデタキコトニテ侍ルニ、マノアタリカ、ル示現カフムリタルヨシ語リケレバ、「メデタキ御事ニコソ」ト、エミアケテミエケリ。サテ申ケルハ、「カ、ル心、イマハアルベクモ侍ラヌ身ニ、天王ノ御計ニテ姫君ノ御果報目出アルベキ御事ニヤト思ハレ侍ルマ、ニ心ニ存スル様申候。姫君ヲ時々カヨハシマイラセサセ給ヒ候ヘカシ。近付マイラセタキ心候」トイエバ、乳母ヲモイカケヌ事トヲモイナガラ、姫君ニ此ノ由云ニ、「アラ心ウヤ」トテ、思ヨラヌ心地ナルヲ、「年久ク参籠シ、マノアタリ天王ノ御ツゲアル事ナレバ、様コソ候ラメ。御身ヲステサセ給トヲボシメシテ、一夜ニテモ、カノ心ヲソムカセ給フベカラズ」トナク／＼クドキケレバ、「ナニトモマ、ガハカラヒ」トイエバ、悦テ日トリナドシテ迎ニヤルベキ約束シケリ。

房主悦テ、輿車ハ隠便ナラズト思ヒ、大ナル唐櫃ヲタツネテ、京ニ仏ノヲハシマス、ムカヘマイラスルヨシニテ、隣房ノ法師原ヤトヒテ、飯酒ヨク／＼モテナシテ京ヘヤリケリ。コシクルマナラムダニモヨシナクラボウルニ、入物サヘ心ウクラボエテ、泣キ臥給タリケルヲ、乳母トカクスカシコシラエテ、イダシタテ、唐櫃ニ入テ封ツケテ、カ、セテユキケルガ、

夏ノ事ニテ、世間アツカリケルマ、ニ、唐櫃ヲバ大道ニ打置テ、賀茂河ニテ水アミケルホドニ、時ノ摂政殿ノ御子、二位ノ中将殿トカヤ申ケル、濟々トシテ賀茂へ参ジテ、下向シ給ケルガ、「此ノ唐櫃開テミヨ」ト被仰、開キミレバ、実ニウシクシキ姫君ナリ。「アラウレシ。コレハ賀茂ノ御利生ニコソ」トテ車ニウチノセテ下向シ給ケリ。

サテ、「ナニ、テモ入ヨ」ト被仰ケレバ、中間・雑色ドモハシリマハリテミルニ、二歳バカリナル犢ノミエケルヲ、トラエテ、ヘシ入テ封付ケテケリ。法師原コレヲシラズ、モチアゲテミレバコトノホカニヲモカリケレドモ、カ、ル事トハ思不寄、「チカラガナクナリテ、ヨモキニヤ」ト云ケル。サテ鞍馬へ帰テ、「御仏イラセ給へリ」ト云ケレバ、房主悦テ、法師原、又ヨク／＼モテナシテ、弟子ドモヲモ、「御房タチ、隣房へユキテアソベ。仏ノ御前ニテ心静ニ行ズベキコトナリ」トテ、スカシヤリテ、カキガネカケマハシテ唐櫃ヲ開テミレバ、犢走出テ尿ヒリチラシ、障子皆フミヤブリテ散々ノ事ナリケリ。乳母・姫君ハ信心フカクシテ目出クサイハイテ、一期トトミサカヘケル。

房主マコトニ虚妄罰、二世不得ナリケム。仏神感応ハ、只一世バカリナラズ、当来モ御タスケアリケン。信心ノ徳、誰カイルカセニ思ハムヤ。  
〔雑談集〕（寛永二二年版本）卷五<sup>注II</sup>

身代わりの趣向に関しては云うまでもなく、「天羽衣」での即仏尼という僧形の設定、「唐櫃ヲ開テミレバ、犢走出テ尿ヒリチラシ、障子皆フミヤブリテ散々ノ事ナリケリ」といった『雑談集』の表現は、そのまま即仏尼が血を流すシーン<sup>注III</sup>を彷彿とさせる内容を持ち合わせているのではないか。『天羽衣』第⑥章「尼法師の娘の君」との関わりが十分確認できるものである。

ちなみに『三国因縁地藏菩薩靈驗記』卷八第三話や、中世小説「さゝやき竹」も同工異曲の内容を持つという。本話が広く流布したものであったことは『沙石集』卷第二「地藏菩薩種々利益事」に「鞍馬ノ老僧モ、ソラ示現ノ故ニ、坊ヲモ牛ニ皆踏破ラレニケル事、思合セラル。常ノ物語ナレバ、委ク是ヲカ、ズ」と見えることから推察できるところである。<sup>注III</sup>

\* \* \* \* \*

今般の一斑の指摘も含めて、様々な典拠群の模索がこれまでなされてきた。かく云う如く、第⑤章を除いて概ね



類似性の高い内容を備えた作品の指摘がなされているといつてよいだろう。

現段階で確認された様々な先行作品を眺め見るとき、問題となるのは、こうした作品群を貫き『天羽衣』として形象化するに至った△構想▽の側にある。如何に、どういう構想がこれらの作品群を結びつけ、一つの作品として誕生せしめたのであろうか。

六樹園が、シナの小説・戯曲から多くの趣向を借りて来たことはこのようであるが、それらはもとより偶然の暗合と見るべき性質のものではない。事実彼がシナ文学に親しんだことは、『通俗醒世恒言』（寛政二年・一七九〇）『通俗排悶録』（文政十一年・二八二八）など訳著があることを見ても知られる。就中『醒世恒言』は、彼の最も興味をもったものであり、『通俗醒世恒言』は、わずかにその中の四篇を訳出したものに過ぎなかつたけれど、その巻末に見える『後編通俗醒世恒言』三十六種近刻の予告は、やがて彼がこの書の全訳を志したことを語るものであつた。もつともこの副刻はついに実現しなかつたが、少なくとも彼がその全部を通読したことは、これによって見るも疑いを容れないところである。『笠翁十種曲』についても同様で、これは別に翻訳したものはないが、この物語と同年の刊行になる『近江県物語』が、その中の一つに拠つてゐることを、門人の筆を通じて明かしているのを見ても、やはりその一通りには目を通してゐたものと考えて差支えなさそうである。こうして物語は、大体謡曲「羽衣」の結構に基づき、これにシナ小説及び戯曲の趣向を取入れ、さらに『今昔物語集』の一話、「尼共入山食茸舞語」に語られている話を加えて成つたものであつた。しかし出来上つたものは、これらの苦心にもかかわらず、余り多くの価値を見出しがたいものであつた。

（重友毅前掲論文）

従前の研究は、雅望が『通俗醒世恒言』という翻訳書を刊行していることに触れ、『天羽衣』執筆を「偶然の暗合と見るべき性質のものではな」く、その訳書存在と絡めて考察されてきた感がある。また近年「近隣に住む親しい二つの家とその子弟の婚儀、両家の家運の盛衰、死後の花嫁など、物語構成を『西山物語』から学び、綾足を強く意識している」との発言も見られる。その二つは齟齬するものではないと思われるし、一つの執筆動機として考えられる処でもあろう。『醒世恒言』巻九「陳多寿生死夫妻」、『笠翁十種曲』「奈何天伝奇」、『警世通言』巻二五「桂員外途窮懺悔」、『今昔物語集』巻二十八ノ二十八「尼共入山食茸舞語」、『雜談集』等々を結ぶタテ糸は、果たして如何なるも

のか。残念ながら今、代わりうる見解を示すほどに一貫したものを作品内部に見出し得ていない。むしろ、それこそ跋文に云う「あがうしの筆のすきみ」として、手元に存在した様々な話を集め、羽衣説話という八世界Vの中に、綯い交ぜられたに過ぎないのではないか。話の帰結を羽衣伝承に委ね、挿話のごときものを様々にかき集めてきたのではなかったろうかとさえ思われてくるのである。

出来上がった作品はどうかというと、「文人の消閑の技という性格が強い」といった評のほかにも「天羽衣」二巻は、そのうち分量も少なく、また大した価値も置きたいものではある（重友毅）等々、低い評価に彩られている。確かに批評的に述べるならば、何よりも全体の筋立てがすこぶる常套的である。「此衣、しばし汝に預けつかはすなり。これ秘め置きなば、さいはひこよなかるべし。今より千日を過しなば、爰に來りて、其衣うけとるべし」「汝宿業によりて、今しばし、憂めをや見まし」という第①章での天女の言葉が、物語の方向を規定している。その間にある八事件Vらしい事件といえ、第⑤章での悪藤太の国司のもとへの侵入であり、その悪藤太も結末では遠国へ追放されるばかりである。例えば悪藤太がからめ取られた後、「いかに思ひけん、黒良が事をば、つゝみていはざりけり」とある。物語としてこの悪藤太の黙秘は様々な展開の可能性をもたらさうはすなのに、第⑦章で黒良の送った文が発見され、黒良・磯田夫婦が絡めとられるという事を、説明的文章によつて導くだけに終わらせてしまう。また、第①章で三保の長者の善根を施す所からその死を述べるまでの場面も、物語るよりはむしろ展開させることに重きをおいた説明、粗筋に過ぎないといった印象すら持つ。幾つかの点でなぜこうした場面を据えるのかに疑念を起すところ、多々存在するのである。

登場人物の命名も安易との誹りを受けよう。白と黒という命名（謡曲「羽衣」では伯良であった）は、命名された時点で善人・悪人が明白である。雲井という下女の名も寓意的なものと言える。明瞭な人物設定が、命名通りにしか進行していないのである。そして何よりも元々の原拠の骨格の、如何に残存した形でしか話が展開していないかという点

も重要なのではないだろうか。その作りざまを思うべきである。

思うに、かく常套的であればあるほどに、展開に重きをおくが故に、物語は、趣向の局部肥大化した形で呈示するしか、読者の興味を持続しきれないのではないか。例えば第③章で舞茸による人々が踊り狂う場面を、例えば第⑥章に登場する尼法師の死体のさまを思い浮かべてもよい。作品中に死骸を登場させての志太の家での悲劇は、読者にとつての喜劇でもある。こうした笑話的要素が導入されていることは従来云われるように雅望の特徴とも云いうるものである。<sup>注V</sup>第⑥章にみる死骸嗜好とも云える感覚は、同時代の京伝『曙草紙』、『梅花水裂』といった作品にみる殺戮場面とは異なる、一種独特の笑話的側面を醸し出している。

### 「文」への注視

ところで、様々な典拠群と『天羽衣』とを並べ置くと、如何に各々の文章の原態を感じさせないほどに文章を均一化を果たしているかには注目してよいだろう。試みに和漢の典拠を並べおき、それを如何なる文章に置き換えているかを見るがいい。単調な典拠との対応ぶり、構成の単調さであつてみれば、典拠の組み合わせよりは、むしろ如何に整えるのかに力点があるとして良いのではないだろうか。そのことは雅望が奈辺に興味をもっていたかを窺うことにもなる。

ここで私は、『天羽衣』跋文に「例のみやびたるさまはとり置きて、ひたすらさとび言をもて、かいつづりたまへれど」とあるに注目したいと思う。「例のみやびたるさま」と云われる程に雅望の「みやび」への興味は尽きない。例えば雅望が『雅言集覽』を編したことは夙に知られるところであるが、その『雅言集覽』凡例にはかく記されている。<sup>注VI</sup>

傍線部に注目いただきたい。

一、此書に出しつる雅言ともは、延喜よりこのかた歌にも文にも用ゐなれたる詞ともなり、ちかき世となりて、あやし

耳なれたる詞とをとりましへて、文なとつゝる人あれとさるはいみしきひかことなれば、こゝにはさやうのたくひはうち  
はふきて用ふへきかきりの詞をのみとり出てしるしつけつ

一、雅言はよくあちはひて我ものとせされは用ゐさまたかひて、大にあやまることあり

雅望は、あやしく耳なれたる詞を交えて文綴ることを積極的に否定するスタンスをとっていた。では云うところの「雅言」とは何か。同じく本居大平は、その序文中でもつばら対象としている書の存在を端的に示し、本書の性格を明らかにしてくれている。

石川雅望といふ人のこのみやひ言あつめしめされたる巻のはしめを見れば古事記日本紀の御典をはしめ万えふ古今六てふ  
夫木の代々の歌巻うつほ竹とりくゑんし栄花とくさくの物語ふみとも大かた雅言のあかしとすへきかきりつみいてえり  
いてゝ（後略）

跋文に従えば、『天羽衣』は、そうした「雅言」ではなく「さとび言」にて記されたものだという。再び『天羽衣』跋文をひく。

例のみやびたるさまはとり置て、ひたすらさとび言をもて、かいつゞりたまへれど、さすがにきはくしうをかしさは、た  
ぐひあるべうもあらず。 〔天羽衣〕牛多楼恒成跋

雅望と「さとび言」との関わりは、何も『天羽衣』にのみ確認されるわけではない。

かゝるふみつくり出んは、おとなげなくほいなき人まねにこそとて、たびく人のそゝのかしつれど、うけひかでやみにし  
を……すべてあやしうよこなまれるさとびごとをもて、しるしつけつれば、きゝにくきことこそおほからめ。  
〔飛驒匠物語〕六樹園序

されど、うしの常の筆つかひにも似ず、もはらさとびたることのはもてつゞけられしは、をさなき人のよみ見んとき、こゝ  
ろえやすからんためとにや。 〔近江県物語〕夙興亭高行跋

一体「さとび言」とは何なのだろう。いま試みに谷川士清『俚言集覽』凡例から幾つかひくくならば、

一、俚言郷語自つから善謠あり。此方古人の口より出て移徒流転するあり。亦西土載籍に原いて里巷の常言となるあり。

今聞まゝに編輯する故に取次これを載す。一々出処を拠援せず。

一、此集鄙俗を先として雅馴を後とし、輒今を主として上古を賓とせり。鄙俗は人々の知るところ、輒今は耳目の及ぶ所なればなり。

ということになる。しかし、どうもこれだけでは雅望の「さとび言」は説明できないように思われる。「雅言集覽」の例にみる如く、雅望にとつての「さとび言」は、決して「とりまじへた」ものであつてはならないはずだからである。「飛驒匠物語」は、全て「あやしうよこなまれるさとびごと」にて記し、『近江県物語』は「もはらさとびたることはもてつゞけられ」、「天羽衣」は「ひたすらさとび言をもて、かいつゞ」つたと言う。「とりまじへ」ることのない純粹なる「さとび言」とは、果たしてどういふものであろうか。

ともかくも、雅望周辺に里言・雅言に対する発言の多きことを思うとき、少なくとも雅望にとつて、作品構想云々よりも文章への興味の存在を推し量ることは許されるであらう。そういえば雅望「しみのすみか物語」は里言による笑話、雅言による笑話集であつた。では、その他の作品ではどうだろうか。

此書は石川雅望その手ぶりを一つ二つ書いつけたるが、斯くはなれるなり。其書ける事はさとび事ながら、詞はみやび言にとりなせり。そもく古と今と手ぶりのうつりもて行く如く、ことばもはた変り行くものなれば、今の事を古ぶりに書かんはいと難き事にて、石上ふりにし書らよく見わたして我がものとせざれば斯くはなしがたきわざぞかし。たはぶれごと書けるは思ふ心ありてなるべし。見ん人心あらなん。

（「都の手ぶり」橘千蔭序）

江戸市井の風俗を描いた雅望『都の手ぶり』は、さとびたる対象を「みやび言」にて書き記したもので、ある意味で「天羽衣」の逆を標榜する。<sup>注VII</sup> 雅言とさとび言、いずれにせよ雅望は、一貫して書き記し続けていた。

「そもく古と今と手ぶりのうつりもて行く如く、ことばもはた変り行くものなれば」とは橘千蔭の発言であるが、では雅望の対象とする「さとび言」は、果たしていつの世の「さとび言」であつたのだろうか。物語の時代と場所を規定したとき、「とり交へる」ことなき立場に立脚すれば、自ずから登場人物の話す言葉も定まる。「ふりにし昔の代

語」、「駿河国うど浜にすめる翁の、むかしよりのつたへごととて、語り出たるを、さながら筆にうつせるなり」（六樹園序）と仮構した『天羽衣』にあつて、遠き昔の民のことは、我々の云うところの、或いは江戸期における雅語なのかそれとも俗語なのか、あるいは全く異なる言葉であつたのか。そもそも「とりまじへ」ることのない純粹な「さとび言」で書き記すことは可能だつたのだろうか。

率直に云つて、今日文献上に残された「なかつ世」の文献上の言葉が、貴族たちによつて書き残されたながしか  
 △雅▽のものであるとするならば、そうした「なかつ世」の庶民の△鄙▽の言葉を、如何にすれば再構築することが可能となるのか、検討がつかない。かなりの困難のつきまとう事柄なのは明白だろう。残された資料は限りがある。残された文献中から掬い取る事以外には、今日残された言葉に探ることしか手だてはないのである。だとすれば、そのことは常に俗に失する危険を孕んでいたのではなかつたか。△鄙▽の世界が描かれる以上、用いる題材に「今昔」や「雑談集」の説話の世界に見いだされたのも意味のないことではなかつた。勿論、誰にとつての△雅▽△鄙▽であるのかも問題であるが、「とり交へる」ことを拒絶し、雅望の云う「さとひ言」によつて統一されたものであつたとするならば、元々の作品のもつ位相をも消去し、本来存在するはずのない言葉に彩られた、一種違和感をもつた作品となる可能性は高い。その意味で雅望の試みは、甚だあやうさを孕んだものではなかつたらうか。

「行文の流麗暢達が、やゝもすれば浮調子を誘起して誠実味の熱を欠き、ためにその内容と調和せず、全体に亘つてさら／＼とした感触だけを残す」とは、鈴木敏也の『天羽衣』批判であるが、こうした印象を与えるのも偏に取り交えない「さとび言」によつて一貫した「文」の力なのであろう。<sup>註冊</sup>

\* \* \* \* \*

言葉をいにしへにならひて、事は今の有さまにもせしくだりも多かれば、いかにぞやと思ふふし／＼すくなからず。まい  
 てやかくになる稗史を父母として、かゝる物語を作らんに、雅言もてものせんとしつること、かへす／＼もあやまりな

り。そをいかにぞといふに、稗史野乘の人情を写すには、すべて俗語に憑らざれば、得なしがたきものなればこそ、唐土にては水滸伝・西遊記を初として宋末元明の作者ども皆俗語もて綴りたれ。

馬琴「本朝水滸を読む并批評」の一節である。綾足の雅文小説に対する批評であるが、この批評に次の一文を対峙するとき、まづうことなく当代の作品批評としての価値をもたげてくるのである。

いでやあやしきは、このごろ世にとりはやす物語文よ。さるは、おのれだに知らぬみやび事をさへとりまじへ、ほゆがめて、あながちに口さきらとぎてのゝしるから、かの鳴く声鶴に似かよひて、あらぬ獣の化けそこなひたらんやうに、うたてちなき書きざまをますめり。

まして忠孝のうへをしも一際あはれに取りなさんのこゝろむけより、いまはしくむづかしき筋をさへむねと取出でゝものすれば、なか／＼見るにけうとく、読むに堪へざるところ／＼ぞ多かる。

これ（山本註「飛驒匠物語」はさる類とは事たがひて、目やすくやすらかなる筆づかひもて、現世の榮に仙境のながく久しき楽しさをさへとり加へて、こよなうめでたく作りなし給へれば、げに／＼のどけき時代には、つき／＼しう事あひたる心地ぞする。もとより彼のにのみまひめくしわざなるを、痴がましとて、こゝるとものし給へらざりしを、あながちなる某がしひ言にまけて、しぶ／＼にももし給ひぬるとか。

※任意に改行・漢字を宛てた

「飛驒匠物語」の、尋幽亭載名なる人物の手になる跋文である。今、注目すべきは「とりまじへ」たる物語文への批判意識である。雅望の試みは、序跋を記した周辺の人たちの知るところであつた。「とりまじへ」ざること固執したその姿勢は、常に一貫していたのである。

## おわりに

逍遙「小説神髓」下巻（第5冊）7ウに云う、

俗言のまゝに文をなすときは、あるひは音調の侏儻に失し、あるひは其氣韻の野なるに失していと雅びたる趣向さへに為にひなびたるものとなりて俚猥の譏を得ること多かり

ここに云う「俚猥の譏」がどういうことを指すのかは定かではないが、文学を「学」として高めようという逍遙の態度からは「俗語のままに文をあやなすこと」は許されぬことであつたのだらう。江戸期においては曲亭馬琴によつて、また近代においては坪内逍遙によつて、「俗言のままに文をあやなす」ことに對し、きびしい評価をくだされ、ついに命脈を絶つた小説群としてこれまで雅文小説も位置づけられてきた。だが、こうした呪縛から解放される必要はありやしないか。とり交えることを否定し、さび言のままに一貫していたのだとしたら、その試行は評価の網にすくい上げるべきではないか。

久保田啓一氏の指摘するごとく(「文体とは何か」所載論文)、文化年間に本格化する馬琴主導の読本の作風に南畝が批判めいた言葉を残したのは周知の事実である。市川寛斎・大沼竹溪・頼杏坪の詩の怪異趣味を馬琴・京伝の読本流行とからめて論じた(二話一言卷三四、文化四年一月二六日)のも、文化二年二月四日付定吉宛書簡に、去年からの絵草子高騰を嘆じたあとで「大方敵討之世界殺伐之風、損春色候事に候」と絵草子の殺伐たる作風への嫌悪を表明した事実を重ね合わせて見れば怪異趣味への批判となりうることは云うまでもない。その南畝が、文化五年二月二四日、「近江県物語」を読み、「俗流にあらざる事をしれり」(「玉川砂利」)と高く評価している。

南畝の視点への回帰こそが、今一度必要なのではないか。馬琴の批判と南畝の評価、毀誉褒貶相混じるなか、雅望の一作「天羽衣」が、今日からみても他の読本作品にない独特の雰囲気醸し出していることだけは確かなのだから。

△注▽

注Ⅰ―他にも稲田氏は雅望の読本には、喜劇的作風が顕著であるとし、そこには「笠翁十種曲」との関わりを考えている。

注Ⅱ―三弥井書店 山田昭全・三木紀人校注一五六頁

注Ⅲ―永井義恵「講経談義と説話」(大妻国文4)に「鷲林拾葉抄」所載のささやき竹説話を紹介しつつ、雑談集のささやき



竹についても言及している。

注IV―「時代別日本文学史辞典近世編」江戸読本II(稲田篤信氏執筆)。なお閨小妹氏は先の典拠指摘を受けて、雅望は仏教色の強い作品「桂員外」と、儒教色の濃い「陳多寿」、道教的な「奈何天」を「天羽衣」という一つの物語に取り入れ、翻案したVとの見解を示されたが、日本種の典拠との関わりも踏まえて更なる検討を要する問題であろうと思われる。注V―作品にあるその笑いの要素を考えるにつけ、その卑俗な△滑稽▽こそを描きたかったのではないか。いわば昔の△鄙▽の世界の再現ではなかったのだろうか。

注VI―源典詩は「近き頃江戸なる石川の翁のかゝれし文を見しになかつ世のふみことはよくまなひうつして今のようにいとめつらしうをかきすちとおほえしかは(略)翁はわかきひとよりからのやまとの文ともあまたよみてとしもいまはむそちにもやゝあまりたれと江戸はさらなり都なにはわたりにも和学すといへるきはにはたちならふ人はをさくゝなかめれと常にたはれをにたちまして(略)この翁のなかつ世の文詞なとかたつめおきけんものゝあらはかりえてみましさてこそしたしくあひみるこゝちもせめとつねにおもひわたりたりしをさいつ頃この雅言集覧のことつけおこされしにこそとし頃の本意かなひぬるこゝちせられしかこたひまた板にゑりぬへしとて」と記している。刊行以前より早く成立していたことが分かる。

注VII―にもかかわらず両者の文章にさほどの違いを認められない。そこが問題なのである。ちなみに重友毅は、その論文の中で雅言との差はあまりないとする。

「みやびごと」といい、「さとびごと」というも、結局は程度の相違に過ぎなかつたのである。しかもこうして綴られたものは、なるほど幾分の平明さは加えたにしても、なんら読者の心に訴えるものを持つものではなかつた。それは一通りなだらかに事件を伝えるというにとどまり、その調子も、時に間の抜けた感じを与えはしても、決して快感を与える種類のものではなかつた。その冗漫にして無表情な筆触は、まだしも彼が他の作品に試みた擬古文体の勝っていることを思わせないではおかなかつた。そのなまじいなる妥協は、結果において、元来が生々躍動の氣に乏しい擬古文体を、いつそう生彩のないものにしてしまったのであつた。

注VIII―こうした試みを評価するにあつて、「文」見知ることが作品評価を決める重要な物差しであつたということも重要だろう。このことは拙稿「京伝と和学」(江戸文学一九号掲載)で引用した、黒沢翁満『黒沢翁隨筆』・天保三年四月二十八日付殿村篠斎宛馬琴書簡を参照のこと。